

留学生の「窓」としての 日本語教育



国際部長 黒田一雄

私は20年前に米国ニューヨーク州北西部のイサカという小さな町にあるコーネル大学という大学で博士号を取得した。イサカはまさに *Middle of Nowhere* とコーネルの学生が自嘲的に言うほど田舎なので、米国への出張のついでに寄れるような場所ではなく、卒業以来、私も3度しか訪れていない。しかし、その訪問の度にお目にかかるのは、私の指導教授と、Deborah Campbell という英語の先生だ。博士課程に進学したときに、私は既に米国の大学の修士課程を終えていたのだが、英語がどうしても上達せず、コースワークについていくことも、博士論文執筆にも大きな不安を抱えていた。そのような私を支えてくれたのが Deborah だった。（彼女は、大学院の学生には、自分のことをファーストネームで呼ぶように言ってくれた。）私は彼女の *English Academic Writing* のクラスを何度も履修し、論文執筆の指導を受けた。そして、そうした専門から離れて履修したクラスで、他分野の多くの留学生と知り合い、Deborah から英語による論理の構成やその背景にある考え方まで、留学生仲間と共に学ぶことによって、英語の壁をなんとか乗り越えることができた。今、自分がアジア太平洋研究科で、多くの留学生を指導するようになって、彼らの言語教育を考える際の、私の原体験である。

コーネルでは、1年契約の奨学金・授業料免除頼みの貧しい大学院生だったので、翌年の確実な収入を確保するために、日本語教育のTAになるためのサマーコースを履修したことがあった。結局、大学からの奨学金は何とか継続され、日本語のTAを務めることはなかったのだが、実際の米国人学生を対象にした日本語教育を実践しながらの研修では、母国語といえど（いやだからこそ）日本語を外国人に教えることがいかに難しいものであるかを、実感することとなった。米国人の学部生の、文法や言い回しに関して次から次へと繰り返される質問に、私は十分に対応することができなかった。しかし、外国人に日本語教育を通じて、日本や日本人の考え方を伝えることの可能性についても気づかせてくれた。これが、第二の原体験かもしれない。

もう一つのもっと古い原体験は、米国留学前の私が早稲田の学部生だったころのことである。私は学部の2年から4年までアジア文化会館というアジアからの留学生や研修生の

寮で生活した。ここには日本語学校が併設しており、多くの日本での大学進学を目指す学生が会館で生活し、学んでいた。会館に住む数少ない日本人として、日本語学校の学生とはできるだけ日本語でコミュニケーションをとろうとしていたが、言葉の不自由な場所で生活することの大変さと彼らの日本留学にかける思いを、彼らとの時間から学んだように思う。

そうした経験から、私が学んだことは何か。語学教育は、留学生にとって、その土地での勉強のためだけではなく、その文化や社会を知り、その土地の人々との絆を育むための「窓」のようなものだということだった。「窓」が開かれた時、留学生にとっての、その学びと人生へのインパクトは非常に大きいものがある。しかし、「窓」を開くためには、留学生も、そして語学を教える側も大変な努力を要する。

早稲田には現在 5000 名以上の留学生が学んでおり、この数は日本の大学で最大数である。このうち、約半数が日本語の課程で学び、後の半数が英語の課程で学んでいるが、日本語の課程の学生だけではなく、英語の課程の学生にも日本語教育のニーズは大きい。Waseda Vision 150 では早稲田における留学生数を 2032 年までに 2 倍の 1 万人にするとしている。早稲田における日本語教育のニーズは高まるばかりである。日本語教育研究センターが提供する日本語の授業数やその受講生の数も増加を続けている。早稲田の日本語教育は、質量ともに、日本、つまりは世界最高の水準にあり、世界の日本語教育をリードする役割を有しているといえる。ただ、そうした大きな数の陰には、日本語の先生方お一人お一人が、一人一人の留学生に向き合ってきた努力の積み重ねがある。早稲田で学ぶ、そして日本で学ぶ留学生にとって、豊かな学びと人生を得られるような「窓」としての早稲田の日本語教育の発展を期待したい。

(くろだ かずお, 早稲田大学国際学術院)